

B部門 優秀賞 作品 No. 66

次世代ネジ予測 ―見えるネジと見せるネジ―

椿 友子

モーツァルトの次にはバッハが誕生したように、中世のあとにはルネッサンスがやってきたように、いつの時代も歴史は「和」と「乱」を繰り返してきました。株式市場では、株価がある日暴落しても、いつかは底値を打ってまた反転し、渋谷の女の子たちの間では、「ヤマンバ」「ルーズソックス」が流行ったと思ったら、次の年には「癒し系」「ハイソックス」が流行りました。このように、ひとつの潮流はあるときを境に間逆の方向へ進むという現象は森羅万象、古今東西あらゆる場面で見られます。私はそのことに注目して、このエッセーでは次世代のネジのあり方をすこし考えてみました。「ネジ」は人間が道具を使い始めてから何百年、何千年もの間、ほとんどその形を変えずに不変的に使われてきました。ですから、素人がどんなに頭を絞ってもそれほど真新しいアイデアなんて出るわけではないのです。ただ、そこから一步退いて、さらに大きな視点を持って、先に言及した、人のなす業の描く波動の中にはめてみた場合、すこし新鮮な風が吹き込むのではないかと思います。

さて、昨今では、老若男女、誰もがパソコンや携帯電話を使います。いま、目の前にパソコンがある方は、そのキーボードを裏返してみてください。よく見かけるネジが数本、等間隔で並んでいるはずですが、無機質なその存在はあえて気をつけなければ目に留まることもありませんが、また同時になくてはならない存在でもあります。私が使っているノートパソコンも3年前に買った当時は最新のMac bookでしたが、その裏面は目立たない数本のネジで留まっています。しかし、驚いたことに、近頃の店頭に並ぶパソコンやキーボードの表面にはネジ一本見当たりません。特に、そのスタイリッシュで革新的なデザインで、いまやMicrosoft社を追い抜く勢いのApple社の製品は、「ネジなし」を代名詞にしているかのようなシンプルなデザインが目を引きます。携帯電話も同じです。携帯電話の場合はその傾向がかなり前から浸透し始めましたが、私の決して新しいと言えない携帯電話の表も裏もネジは一本も見あたりません。パソコンや携帯電話のような繊細で、素人が内部を簡単に触れてはいけないものが、薄い2枚のプラスチックの板だけで留められているのです。もちろん実際は、一枚の薄いプラスチックの板をはがすと、極小さなネジが何本、何十本と網の目のように使われています。ネジはやはり必要不可欠なものなのです。それでは、なぜネジをわざわざ隠す必要があるのでしょうか。答えは簡単です。それがいまのデザインのトレンドだからです。シンプルなもの、スマートなもの。余計なものを全て排除して、無機質さを追及したデザインが今は主流だからです。しかし、先にも述べたとおり、いつもトレンドはある時を境に逆行するものでもあります。いまの短期的なより

小さく、より目立たないネジの時代もいつかは終わるのでしょう。そこで私が提案する次世代のネジはこれまでのような「見えるネジ」を目立たないように隠すのではなく、大きく人目を引くような「見せるネジ」です。

ところで、シンプルでスマートなデザインが今のトレンドと書きましたが、その傾向はパソコンや携帯電話だけではありません。例えば、昨今の建築様式、内装を思い浮かべても非常にシンプルなもの好まれているような印象を受けます。私の働くオフィスビルも、その周辺のビルもどれもガラス張りで似通ったものばかりです。一方で、そのトレンドに対して逆行するように、機能性を最大限に追及し、前衛的な建築スタイルを確立した人もいます。ロンドンの金融街に建つロイズ・オブ・ロンドンやパリのひとつの観光名所となったポンピドー・センターをデザインしたリチャード・ロジャースがその一人です。古く伝統のあるロンドンの金融街ザ・シティのほぼ中心地に建つその建物は、配管や設備類が外部に露出した大胆な外観で初めて目にする人を圧倒します。しかし、ガラス張りのビルの合間に突如として現れるその姿をよく観ると、違和感を放つどころかむしろ街全体の調和を保ち、瞬く間に未来空間にタイムスリップしたような感覚にも襲われます。

この未来都市のような建物は「奇抜さ」ばかりが目につき批判的な意見を浴びることも多々あるようです。しかし私はこの建物は次にあげる二つの観点から、単なる奇抜なモダン建築以上の、次世代のトレンドの先駆けであると考えています。まず、その実用性に着目すると、表面を覆い隠さず内部構造を露出することで、内部の劣化を見落とさず、また通常業務を妨げることなく修繕作業を行うことができます¹。さらにそのデザインに着目しても、明らかに教会建築をモチーフとしたと思われる外部に露出した柱は、イギリス教会が古く用いたゴシック様式を現代に甦らせたものといえます。言い換えれば、この建築は何も真新しい奇抜なものではなく、人間の描く歴史の波動を先行している新しいトレンドの先駆けなのだと思います。

少しネジから外れてしまいましたが、このように表面を覆い隠さず内部構造を「見せる」ことは、実用的な理由だけでなく、伝統を引き継ぎながら次世代を通り越して未来都市を彷彿させる新たな潮流として芽を出し始めているのではないのでしょうか。

さらに、同じロンドンの街中にはまさに「見せるネジ」がいたるところで使われています。その際たるものが、TFL (Transport for London, ロンドン交通局) の駅やバス停にある看板やベンチに使われているネジです。少し注意深い人ならば、ロンドンの街を歩いていてこの奇抜な形をしたネジがそこかしこで目に留まるかと思えます。必要以上に大きくて分厚く、その真ん中には穴が二つ空いていて、ちょうど漫画に出てくるブタの鼻のような形状をしています。そのネジは、まるでロンドン地下鉄のトレードマークである、青い丸に赤い横棒のうえに駅名を書いたあのサインにもみえなくはないのです。TFLはこのネジの説明として「防犯面」を強調しています。世界で唯一のオリジナルなネジには、特殊なドライバーが必要であり、ベンチや看板等の盗難防止に役立っているといえます。

しかし私はそれだけのためにあえて大きくて、目に付きやすいネジを使っているわけではなく、ロンドンの一風景のひとつとしてネジを上手に使っているふうに思います。実際に、一度でもロンドンに住んだことがある人ならば、あのネジを見てなにか懐かしさすら感じるのではないのでしょうか。つまり「見せるネジ」は、防犯面から考えられる機能性だけでなく、伝統あるロンドン交通局のアイデンティティとなっているのではないのでしょうか。

このように、私は次世代ネジのあり方として、ネジは「見える」ものではなく「見せる」ものになっていくのではないかと考えます。今のシンプルでスマートなトレンドはいつか終わり、また新たなトレンドが近い将来に始まる時、ネジはこれまでのようにプラスチックの板の下に隠されるのではなく、機能性とデザイン面から「見せる」ものになっていくのではないのでしょうか。その時には、さらなる技術の進歩とともに、ミッキーマウスの顔を模った穴のネジをディズニーランド中のベンチで見かけることもあるかもしれません。